

「白黒写真の可能性に開眼」

映画プロデューサー鶴久森さん

「白黒写真の可能性に開眼した」。そう語るのは神戸・湊川出身のドキュメンタリー映画プロデューサー鶴久森典妙さん(71)＝西宮市。神戸市兵庫区神田町、いちばぎゃらりい侑香で8日まで開催中の「鶴の目Ⅲ モノクローム」では、初めて挑

戦した白黒写真約40点を披露している。

鶴久森さんは兵庫県映画センターで地域での映画上映に尽力する傍ら、核廃棄物やハンセン病など社会問題をテーマに自主映画を製作してきた。

現在、がん治療中で、「遠出



ができないから」と住まいのある西宮を中心に近隣の風景や静物を撮った。「高層ビルがまるで巨大な石に見えたり、枯れ木が金属のオブジェのように見えたり。見慣れた風景だが、とても新鮮に映った」と鶴久森さん。「光の加減で表現が無限に広がる。白黒の可能性にも気付かされた」と振り返る。

(片岡達美)

展示されている作品